

令和 5 年 5 月 23 日現在

機関番号：10101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K20173

研究課題名（和文）宗教意識と主観的ウェルビーイングの関連メカニズムに関する計量的研究

研究課題名（英文）A Quantitative Study on the Mechanism by Which Religious Consciousness Influences Subjective Well-being

研究代表者

清水 香基 (Shimizu, Koki)

北海道大学・文学研究院・助教

研究者番号：20907563

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：日本の宗教状況において、伝統・慣習的な宗教活動（教団への所属認知の有無にとらわれない、地域の祭礼への参加や、神社への参拝など）は、主観的幸福にポジティブに寄与する。他方、占い、パワースポットめぐり、セラピーや癒しのヒーリングといったスピリチュアルな活動は、主観的幸福にほとんど影響しないか、あるいは若干の負の影響を持つ可能性がある。上記のような宗教活動は、神仏や死後世界といった宗教的なことがらへの信心とも結びついており、こうした宗教的な「意味づけ」が、宗教文化的活動と主観的幸福を媒介する重要な要因であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、日本人の宗教意識の構造を定量的に描き出し、その測定尺度の開発を試みるとともに、SWBへの寄与という面での欧米諸社会との共通性に着目し、さらにその関連メカニズムについての検討を行った。宗教意識について、日本と欧米諸社会との国際比較を行うための実験的な取り組みの事例を示すことで、日本を含む東アジアでは未だ傍流に過ぎない宗教に関する計量社会学的研究の方法論的發展に寄与した。

研究成果の概要（英文）：In the context of Japan's religious milieu, it has been observed that traditional and customary religious practices (such as participation in local festivals or visits to shrines) make a positive contribution to subjective well-being. Conversely, spiritual activities encompassing fortune-telling, pilgrimage to sacred sites, therapeutic interventions, and healing practices exhibit limited or potentially adverse effects on subjective well-being. Notably, these religious activities demonstrate an association with beliefs pertaining to divine entities and the posthumous realm, thereby indicating the significance of religious "meaning-making" as a pivotal factor mediating religious-cultural engagement and subjective well-being.

研究分野：宗教社会学

キーワード：日本人の宗教意識 主観的ウェルビーイング 測定の不変性/等価性

### 1. 研究開始当初の背景

宗教性と主観的ウェルビーイング（Subjective Well-being：以下 SWB）にポジティブな関連が認められるというのは、すでに宗教社会学においてはある程度確立された知見となってきた。近年では、欧米キリスト教圏のみならず、イスラム教圏の国々や、アフリカや東アジアの一部地域でも知見の蓄積されつつある。これは日本においても同様であり、特定宗教の信者であるかどうかを問わず、宗教意識と SWB には有意な相関があることが、一般人口を対象とした社会調査の結果に基づいて報告されている（櫻井・清水 2019）。

本研究の問いは、では、なぜ、そのような関連が認められるのか、ということである。欧米諸社会の研究では、しばしば、「宗教的な意味づけ」の過程が注目されてきた。もし、つらいことがあっても、それを神からの「試練」や「恵み」という仕方を受け止められる人は、そうでない人よりも、SWB の低下につながりにくいとされる。また、人は、人生に意味を求め、死を克服したいとする欲求を有しており、そもそも人々の宗教に対するニーズは、こうした意味づけの部分にこそあるという論者もいる。しかし、上記のような説明は、飽くまでも、キリスト教が中心的な位置を占める欧米社会において、展開されてきたものであり、それを即座に日本に適用することは難しいだろう。本研究では、日本においても、宗教意識と SWB に関連が認められるのはなぜかを検討とする。また、この問いにアプローチするにあたって、日本人の宗教意識には、どのような側面があり、それらの側面のうち、どの側面が SWB と関連しているのか。人々は宗教という現象をどのように捉えており、彼らの社会階層やライフステージに応じて、どのようなことを宗教に期待しているのかということ、一般人口を対象とした社会調査のデータを用いて、経験的に明らかにしていくことを試みる。

### 2. 研究の目的

日本人の宗教意識の構造を明らかにするとともに、日本においても欧米諸社会と同様に、宗教意識が SWB と関連する要因を明らかにする。

### 3. 研究の方法

(1) 既存調査の二次分析：本研究の1年目にあたる2021年度には、以下にあげる二つの異なる科研費研究プロジェクトから、調査データの提供を受け、その二次分析を行った。①「宗教と主観的ウェルビーイングに関する意識調査」（基盤 B「人口減少社会日本における宗教とウェルビーイングの地域研究」、課題番号：15H03160、研究代表者：櫻井義秀）。上記は、2017年6月に全国15歳から79歳までの男女1,200人を対象と質問紙調査であり、宗教団体所属から、宗教的なものごとへの信心、伝統的・慣習的な宗教実践の実施状況を問う質問項目が収録されている。本研究ではこれを、日本人の宗教意識の基本的構造を記述・検討するための基礎的な分析に用いた。②「セカンドライフに関する意識調査」（基盤 B「高齢多死社会日本におけるウェルビーイングとウェルディングの臨床社会学的研究」、課題番号：19H01554、研究代表者：櫻井義秀）。上記は、2021年5月に調査会社のモニターに登録している全国60歳から79歳の男女1,000人を対象として実施されたインターネット調査である。この調査では、生老病死に関するさまざまな考え方や、人生や死の不安に関する相談等の宗教者へのニーズを尋ねており、人生後期のライフステージにおける宗教の捉え方や期待を把握する上での資料とした。

(2) 全国の若年層を対象とした質問紙調査（郵送調査）の実施：本研究の最終年度にあたる2022年度には、他の研究・教育プロジェクトとの相乗り形式で、調査会社を介した全国調査（「若年層の文化・健康・宗教に関する意識調査」）を実施した。調査の大まかな仕様は以下の通りである。

調査主体：	国立大学法人北海道大学（調査実施機関：日本リサーチセンター）
調査方法：	郵送法
調査対象：	全国18歳から45歳の男女2,000人
標本抽出法：	日本リサーチセンターが保有する郵送パネル「トラストパネル」からの、居住地（全国9ブロック）・性・年齢階級別の比例確率抽出
調査期間：	2022年12月5日（月）～2022年12月21日（水）
有効回収数：	751票（回収率37.6%）、（※ 全体回収数766票のうち、対象者本人以外による回答15票を無効票とした）
謝礼：	協力者に後日500円分のQUOカードを送付

以下の表1は居住地・性・年齢階級別の計画標本サイズ、表2は性・年齢階級の回収率を示したものである。同調査では、本研究にかかわる質問項目として、年中行事や、さまざまな宗教

文化的な活動の実施状況、およびそれらの実践に対する宗教的な認識（意味づけ）の程度を尋ねた。具体的な質問文、回答選択肢、各項目の単純集計結果は、参考文献に記載の調査報告書（樋口麻里編；2023）を参照されたい。

上記調査は、本研究（研究活動スタート支援「宗教意識と主観的ウェルビーイングの関連メカニズムに関する計量的研究」、課題番号：21K20173、研究代表者：清水香基）に加え、若手研究「脆弱性を活かす新たな連帯パラダイムの検証」（課題番号：21K13436、研究代表者：樋口麻里）、および北海道大学文学部社会学研究室共通経費（運営費交付金）の助成を受けて実施した。

表 1. 計画標本（単位：人）

地域	性別および年齢階級										計
	男性					女性					
	18-24 歳	25-29 歳	30-34 歳	35-39 歳	40-45 歳	18-24 歳	25-29 歳	30-34 歳	35-39 歳	40-45 歳	
北海道	8	6	7	7	11	8	6	6	8	11	78
東北	13	10	10	13	18	12	9	10	12	17	124
関東	86	67	70	77	105	83	63	66	73	100	790
北陸	8	6	7	7	11	8	5	6	7	10	75
東海	29	22	23	26	35	27	20	21	24	34	261
近畿	35	23	25	27	38	35	24	25	28	40	300
中国	12	8	9	10	15	11	8	9	10	14	106
四国	5	4	5	5	7	5	4	4	5	7	51
九州	23	16	18	21	28	23	16	19	22	29	215
計	219	162	174	193	268	212	155	166	189	262	2,000

表 2. 性・年齢階級別の回収率

	18-24 歳	25-29 歳	30-34 歳	35-39 歳	40-45 歳	計
男性	42.9% (94/219 人)	35.2% (57/162 人)	22.4% (39/174 人)	35.8% (69/193 人)	39.6% (106/268 人)	35.9% (365/1016 人)
女性	38.7% (82/212 人)	40.6% (63/155 人)	37.3% (62/166 人)	37.6% (71/189 人)	41.2% (108/262 人)	39.2% (386/984 人)
計	40.8% (176/431 人)	37.9% (120/317 人)	29.7% (101/340 人)	36.6% (140/382 人)	40.4% (214/530 人)	37.6% (751/2000 人)

※ 括弧内の数値は、有効回収数 / 計画標本サイズ

#### 4. 研究成果

(1). 一般人口を対象とした調査（宗教と主観的ウェルビーイングに関する意識調査）の二次分析：日本人の宗教意識は、行動・信念の各側面において、伝統・慣習的なもの、制度宗教的なもの、スピリチュアルなものの3つに大別して見ることができる。そのうち、伝統・慣習的な宗教実践—教団への所属認知の有無にとらわれない、地域の祭礼への参加や、神仏への信心の表明—は、主観的幸福にポジティブに寄与する。他方、占い、パワースポットめぐり、セラピーや癒しのヒーリングといったスピリチュアルな実践は、そういった行為をとらない人との比較において、主観的幸福にほとんど影響しないか、あるいは若干の負の影響が認められる。上に述べたような宗教意識の構造については、以下にあげる他の調査データからもおおむね共通の傾向が認められる。

(2). 高齢者を対象とした調査（セカンドライフに関する意識調査）の二次分析：従来の研究では、年齢を重ねるほど宗教的な考えに親しみを持つようになるとされてきた。しかし、「死後の霊魂の存在を信じるか」「来世への生まれ変わりを信じるか」といった死後観については、高齢者であるほど非宗教的な態度を有する。むしろ、高齢者において、相対的に多くの支持を集め

るのは「人が生きるか死ぬかはその人の自由な選択であるべき」「灰になって土に還るのみ」という意見であった。また、近年、スピリチュアル・ケア関連領域では、物質面だけでなく精神面での死の準備を含めた終活がクローズアップされているが、人生後期のライフステージにおいて、宗教者や僧侶に生老病死に関する相談をしてみたいという人は一割未満にとどまった。宗教者に対しては、どちらかといえばネガティブなイメージを有している高齢者が多数派であり、こうした宗教者一般に対するイメージが、宗教者に対する役割期待を規定する重要な要因となっていることが明らかとなった。

(3). 若年者を対象とした調査（若年層の文化・健康・宗教に関する意識調査）：日本では宗教の有無にかかわらず、神社で参拝をしたり、お守りやおふだを持つ人が少なくない。こうした宗教文化的活動に「宗教的な意味がある」と考える人は少数派で、2割から3割程度といったところである（具体的にどのような宗教文化的な活動の実施状況と、その活動に対する認識を尋ねたかについては、参考文献に記載の調査報告書（樋口麻里編；2023）を参照されたい）。それぞれの宗教文化的な活動について、どのような人がその活動に「宗教的な意味がある」と捉えているかを探索的に分析したところ、それが具体的にどのような活動であれ、当該の活動を行なっているという人ほど、そうでない人よりも「ただの慣習である」と捉えていた。別の言い方をすれば、自分自身はその活動をしていない人ほど、その活動には「宗教的な意味がある」と答えがちであることが明らかとなった。この結果は、①日本人にとって、宗教とは他者性を帯びた言葉であることを示唆しており、また②日常の中でどのように宗教文化的活動・実践が営まれているかによって、その人にとっての「宗教とは何か」という認識が形成されていることを示すものである。また、分析の結果、「何が宗教で、何が宗教ではないか」という理解の仕方が異なると、その人の宗教の社会的な役割に対する期待にも違いが生じることも明らかになった。この結果は、人々の宗教に関する意識や行動、および他の変数との関連を問題とする社会調査において、宗教という言葉を用いること自体の適切さを問うものであり、そのことによって、本研究を含む、従来の調査研究から得られた知見の一部については、今後再検討が求められることとなった。

#### <参考文献>

櫻井義秀・清水香基（2019）「日本の宗教とウェルビーイング」櫻井義秀編『宗教とウェルビーイングーしあわせの宗教社会学』北海道大学出版会。

樋口麻里編（2023）『令和4年度 社会学演習（社会調査紙認定G科目）報告書 コロナ禍における若年層の仕事・健康・家族・政治・文化活動に対する意識と行動 —『若年層の文化・健康・宗教に関する意識調査の分析』から—』北海道大学文学部社会学研究室。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 翁 康健、清水 香基、伍 嘉誠	4. 巻 2023
2. 論文標題 中国少数民族と漢族の間における格差	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 21世紀東アジア社会学	6. 最初と最後の頁 76～93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20790/easoc.2023.12_76	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 真鍋一史・前田忠彦・清水香基	4. 巻 139
2. 論文標題 Schwartzの「価値観理論」の構築とその後の展開：「円環連続体モデル/ヒエラルヒカル構造モデル」に焦点を合わせて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 関西学院大学社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 1～41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 真鍋一史・前田忠彦・清水香基	4. 巻 140
2. 論文標題 国際比較/文化比較のためのMGCFAの応用研究の実践的な展開：Schwartzの「価値観理論」の枠組みにもとづく調査研究の事例をとおして	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 関西学院大学社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 1～19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 真鍋一史・前田忠彦・清水香基	4. 巻 138
2. 論文標題 国際比較/文化比較調査における測定の比較可能性の確認のための統計的技法：多集団確証的因子分析と確証的最小空間分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 関西学院大学社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 真鍋一史・前田忠彦・清水香基	4. 巻 137
2. 論文標題 国際比較 / 文化比較調査における測定の等価性 / 不変性の研究 : 多集団確証的因子分析 (MGCFA) を中心として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 関西学院大学社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 清水香基
2. 発表標題 宗教性が主観的ウェルビーイングに寄与するメカニズムに関する検討 : 『宗教と主観的ウェルビーイングに関する調査』のデータ分析から
3. 学会等名 「宗教と社会」学会 第29回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 真鍋一史・前田忠彦・清水香基
2. 発表標題 国際比較 / 文化比較調査における測定の等価性 / 不変性の研究 : 多集団確証的因子分析(MGCFA)を中心として
3. 学会等名 日本行動計量学会 第49回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Koki Shimizu
2. 発表標題 Religion and Democratic Values in East Asian Countries
3. 学会等名 The 36th Conference of The International Society for the Sociology of Religion (ISSR/SISR) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yoshihide Sakurai & Koki Shimizu
2. 発表標題 A Study on the Attitudes and Behavior of Japanese Students : A Proposal for Comparative Research
3. 学会等名 The 3rd Annual Conference of the East Asian Society for The Scientific Study of Religion (EASSSR) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Koki Shimizu
2. 発表標題 The Effect on Happiness of Religious Values, Beliefs and Practice of Non-Religious People in Japan
3. 学会等名 The 3rd Annual Conference of the East Asian Society for The Scientific Study of Religion (EASSSR) (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 清水香基	4. 発行年 2022年
2. 出版社 北海道大学出版会	5. 総ページ数 320
3. 書名 「第16章 データから見る日本と世界のウェルビーイング：指標を通して考えるこれからの社会とウェルビーイング」櫻井義秀編『ウェルビーイングの社会学』	

1. 著者名 Koki Shimizu	4. 発行年 2022年
2. 出版社 World Scientific Publishing Company	5. 総ページ数 22
3. 書名 "Chapter 8: Changes in Religiosity in the World's and Japanese Modernizing Societies: Convergence and Divergence of Religiosity in (Un)consciousness" in Satoshi Abe & Tai Wei Lim eds., Modernization in Asia: The Environment/Resources, Social Mobilization, and Traditional Landscapes Across Time and Space in Asia	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------